

音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

自然な聞こえ方 (10)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

思い出せる音楽

北原白秋作詞・山田耕筰作曲の「からたちの花」という曲があります。今どんなメロディだったか？と考えた人はいますか？勿論一度も聴いたことも歌ったこともなければ別ですが、簡単に思い出せたものではありませんか。

からたちの花が咲いたよ。

白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。

青い青い針のとげだよ。

以下略

いわゆる「共通語」のイントネーションでは「からたち」は「か↑らたち」と尻上りになり、「は↑な」も「咲↑いたよ」もすべてそうなっています。ところがこの曲の第2節では「咲いたよ」と同じ場所に「いたいよ」が入っています。なんと山田耕筰先生はこの場所の旋律を第1節と同じにしないで、「い↑た↓い↑よ」と一度上げた音程をまた下げて変更しています。これは話し言葉の自然なイントネーションをそのままメロディにした例です。

蓬萊泰三作詞・南安雄作曲の「チョコタン」は関西の子供たちにはとても親しみやすい30年くらい前からのヒット曲です。<http://www.mahoroba.ne.jp/~gonbe007/hog/shouka/chikotan.html>でその歌詞と旋律（一部間違っているがそれも愛嬌）が聴けますが

「**なんでかな？ なんでかな？**」の

「なん↑で↓か↑な」という関東人にはフランス語のように聞こえる関西弁が見事にメロディラインに活かされており、全曲を通じて南安雄先生の完璧な関西弁が歌になっています。横山ホットブラザーズの得意芸にミュージックソウツマリのこぎり音楽というのがありますが、「おまえはアホか」とのこぎりがしゃべっているように聞こえるのもすべては言葉のイントネーションに忠実だからです。

TVコマーシャルでも「味噌ラーメン」のフレーズが「ミ・ソ・ラー」の音程になっているのも見事な歌詞と旋律の一体化です。

英語の歌でも「White Christmas」や「Jingle Bell」などの親しみやすいクリスマスソングは比較的英語のイントネーションやアクセントに忠実です。その結果とても憶えやすいというわけです。それに比べて「アメージング・グレース」のように「アーメイ・ジングレース」と

予期しないところでフレーズが切れるような場合、旋律を足がかりにして歌詞を覚えることはきわめて難しいといえます。私の知人の多くは「好い曲だね」と言いながらも冒頭の部分以外は全部「ラララー」で歌っているようです。

曲の覚えやすさのもう一つの要素は「パターン認識」です。チョコタンの歌詞も

なんぎやなあ なんぎやなあ

チョコタン チコタン チコタンタン

どないしょう どないしょう

チョコタン チコタン チコタンタン

チョコタンタン チコタンタン チコタンタン

チョコチョコ チコチョコ

チョコタンタン チコタンタン

ぼくは あなたを……

ぼくは あなたを……

食べてもたろか！

のように同じ言葉が繰り返されますが、この同じようなフレーズの繰り返しに用いられるのが「同形反復」という手法です。旋律の一番小さな単位を動機（モチーフ）と言いますが、さらに小さな単位を部分動機と呼ぶこともあります。ベートーベンの交響曲第5番の出だしの「ジャジャジャーン」は部分動機です。この曲では提示部124小節で68回もこのモチーフが出現し、終わりまでに209回もこのモチーフが使われています。誰がどの部分を聞いてもあの曲だとわかるのはそういうわけなのです。いわゆる正統派の作曲家はすべてこの同形反復で主題を加工します。それに比べアマチュアのミュージシャンの作品の多くは主題の展開が無く、次から次へと新しい主題が出現し、全体の統一テーマはパーカッションのリズムパターンだけというおそまつなものも多く見られます。

現象や物事を感覚が受け止め、それを知性が概念化するという模式を養老孟司先生が先日2月15日のTV番組で話しておられましたが、この概念化とは物事の構成要素や性格を正しく「分類」し共通の概念で「わかる」つまり認知することなんです。パターン認識はそのための重要な手段であり、パターンを見抜き分類することで記憶はスッキリと整理されるわけです。思い出せる音楽はまさしくこの理解できるパターンや概念を含んだモチーフの有無にかかっています。